

学校から職業への移行の変化とフリーター経験

—若者ワークスタイル調査より—

○小杉礼子（日本労働研究機構） ○本田由紀（東京大学） 上西充子（日本労働研究機構）
耳塚寛明（お茶の水女子大学） 堀有喜衣（お茶の水女子大学）

1. はじめに

雇用失業情勢が悪化する中で、若者の失業率はとりわけ高く、特に男性(15-24歳)では10%を超えている。学校時に就職も進学もしない若者の増加、フリーターと呼ばれるアルバイト・パート労働者の増加、学卒就職後の早期離職者の増加等、若者の就業行動の変化はいくつもの統計から確認される。

ここに観察される若者の就業行動の変化は、我が国における学校から職業への移行過程の変化の表れである。学校卒業と同時に正社員として就職し、長期にわたり同一企業に定着する有り方が我が国での学校から職業への移行の伝統的モデルだといえるが、このモデルに沿った移行が大幅に減っている。

本発表では、①伝統的モデルの枠外での職業社会への移行の実態と問題点を検討し、さらに、②ジェンダーと就業形態の関係性を検討する。

2. データ

本分析で用いるデータは日本労働研究機構が2001年2月に行った「若者ワークスタイル調査」で、調査対象は都内在住の18歳から29歳の男女。100地点を人口比に応じた確率で抽出した後、各地点から20標本（フリーター10標本、フリーター以外10標本）計2000標本を地域内現地抽出法により抽出した。なお、フリーターは自称による。

また、分析にあたっては、回収票を母集団の性・年齢別構成比にわりもどす形のウエイトバックを行った。母集団として用いたのは「就業構造基本調査」（1997）で、アルバイト・パート名称就業者（非在学）をフリーターとして、フリーターとそれ以外に分けた時の、性・年齢階層別の人数（都内在住）。18-19歳層については「国勢調査」（1995）の比率に拠る。

3. 分析課題と結果

I フリーター経由の移行の分析

1. 分析課題

フリーター経由等の伝統的モデルの枠外での移行については、その増加は把握されているものの、移行プロセスは把握されていないし、増加の背景や問題点についても充分には整理されていない。本発表では、第1にその移行プロセスを観察して整理し、第2に枠外での移行をする者の属性とこうした移行を支える意識の特徴を整理し、第3に枠外移行での就業の質を吟味し、最後に問題点を検討する。

2. 分析結果

①移行プロセス

a) 就業経験者のこれまでの経験の内容をみると、フリーター経験のある者が3分の1強を占める。そのうちの3分の2近くはすでにフリーターを辞めている。契約社員等を含む正社員以外の形態での就業経験（他形態）に広げると、約半数が他形態での就業を経験している。

経験した就業形態とその時期からキャリア類型を作ると、「正社員定着」35%、「正社員転職」9%、「正社員一時他形態」7%、「正社員から他形態」9%、「他形態から正社員」15%、「他形態一貫」16%、「現在無業」9%となる。これに学校を卒業したか中退したかという分類を付け加えてみる。新規学卒就職をして最初の職場に定着している者は、就業経験者の33%とさらに減る。また、中途退学では特に「他形態一貫」が多い。

b) 就業経験の有る25-29歳層（年長世代）についてみると「正社員定着」は、男性で37%、女性で23%である。この比率は、学歴別の差が大きく、大卒男性では6割だが、高卒男性では2割、中途退学の男性では1割以下である。女性でも同様の差が有る。しかし、男性の中退者や高卒者では、離学当初は無業や他形態であった者が正社員に多く移行しているので、どの学歴でも調査時点の正社員比率は8割からそれ以上になっている。学歴によりキャリアのパターンは異なるが20代

後半では大半が安定的な就業に移行している。これに対して女性では正社員から他形態に変わる者や他形態の就業を一貫している者が多く、調査時点での正社員比率は大卒では7割であるが、短大・専各卒では5割、高卒では4割で、その分他形態の就業や専業主婦が多い。

c) 離学時に正社員就職する者は、若い世代ほど減少している。この傾向は男性、とりわけ高卒男性で著しく、25-29歳層では離学直後に60%が正社員であったものが、18-19歳層では30%に半減し、その分、アルバイトが増えている。年長世代と最近の若い世代では卒業時の状況に大きな違いがあり、年長世代のように20代後半までに正社員に移行する行動を若い世代がとらない(とれない)可能性もある。

②フリーターの属性と意識

a) 現在フリーターである者についてみると、学歴別には、高卒者が4割、専門各種学校卒業者が2割を占める。3分の2は離学以来正社員になったことがない。学歴別のフリーター率は、学校中退者が最も高く、次いで高卒者になっている。また、家庭背景としては、正社員に比べて「生家は豊かではない」と認識する者が多い。

b) 大半の若者が「正社員の方がトク」だとフリーターを経済的に不利な働き方だと認識しながら、「若いうちは自分のやりたいことを優先させたい」や「やりたい仕事なら正社員でもフリーターでもこだわらない」という意見も支持しており、フリーターへの共感を示す者が多い。また、「働き口が減っているのだから仕方ない」等の消極的なフリーター賛成や、「『自分探し』のためにいいことだ」「夢のためにフリーターをしている人はカッコいい」という積極的賛成も多い。フリーターを支える意識は、若者に広く共有されている。

c) フリーターの4割はアルバイトが現時点ではもっとも望ましい就業形態だと考えているが、3年後に実現したい働き方は、正社員や自営業などで、アルバイトはごく少ない。フリーターは一時的な就業形態と考えられている。

③就業の質

a) 正社員と比べてアルバイト・パートでは、職種はサービス職や販売が多く、企業規模は小さい。単位時間あたり収入で比べると、アルバイト・パートは正社員の63~64と低い。この格差は特に高学歴者で大きい。また、アルバイト・パートでは年齢階層が上の者でも単位時間あたり収入はあまり上昇せず、特に大卒では低年齢層より低くな

っている。

b) 仕事にやりがいを感じるか、3年後も同じ勤め先にいたいかに行った質問から現在の職場への評価をはかると、自営・家業従事者で高く、正社員がこれに次ぐ。これに対して、アルバイト・パート、あるいはフリーター、「他形態一貫」では、3年後まで同じ勤め先にいたいと思っていないし、職場の人的なつながりも薄い傾向がある。一方、周囲からうまくいっていると思われているか、将来の見通しは明るいかといった生活全般への評価は女性では全般に高く就業形態やキャリアによる差は小さいが、男性では、アルバイト・パート、フリーター、キャリア別には「他形態一貫」で低い。性役割分業観を背景に、男性の非正社員では、生活面での不満や不安が強い。

④問題点の検討

a) フリーターの3分の2は、学校を卒業や中退してから一度も正社員になったことがない者であり、学卒未就職者への対策が必要である。特に、高校卒業時の就職支援が必要である。また、中途退学者には特にフリーターが多く、またその後も正社員に移行しない者が多い。中途退学者に対して、離学時点およびそれ以降にわたって、職業への移行を支援することが重要だと思われる。

b) フリーターになる者に家計の逼迫が見られるケースがあり、進学や職業能力開発の費用の負担を軽減する支援が求められる。

c) 今の20歳代後半の男性では、離学時にアルバイト・パート、あるいは、フリーターであっても数年のうちに正社員に変わる者が多かった。しかし、最近になるほど学校卒業時に正社員にならない者が、高卒者や中退者を中心に急激している。若い世代がこれまでの世代と同様なキャリアをたどらない(たどれない)可能性がある。

d) 正社員以外の雇用での労働の質は、単位時間あたり収入から考えると、高くない。また、加齢による上昇もほとんどなく、仕事を通しての職業能力向上はあまり期待できない。職業能力開発の機会をどう用意するか政策的対応が必要である。

e) 現状としてはアルバイトを望ましいと考えているフリーターは少なくないが、3年後にはほとんどが他の形態での就業を望んでいる。パート・アルバイトの仕事内容に満足している者は少なく、将来に向けての相談機会や正確な職業情報の提供が必要だと思われる。また、3年後の希望は、正社員と並んで自営業・自由業である。雇用以外の就労への支援も考えられる。(小杉礼子)

II ジェンダーとフリーター—若年者下位グループ間の比較分析

1. 分析課題

労働市場においては、雇用の安定性、賃金、仕事内容の高度さと裁量権などの諸条件をめぐり、階層的な優位／劣位の関係を構成する二項的対（ついで）構造が存在している。そのもっとも主要なものが、正規／非正規という就業形態面での対であり、またもう1つは「男性／女性」というジェンダーの対である。

この2対は相互に独立ではなく重なりあっており、[正規—男性] / [非正規—女性] という組み合わせが労働力人口の中で大きな比率を占めてきた。ただ最近までは [非正規—女性] というカテゴリーは家事労働との兼ね合いを主な要因とする、既婚者を中心とした現象であり、研究も「主婦パート」（[非正規—（既婚）女性]）に集中してきた。若年・未婚の女性の場合、学卒後いったんは正社員として就業する者が長期的に増加し大勢を占めるにいたっているが、この場合も、特定の場合を除き、仕事内容やキャリアの展開可能性などの点で男性の正規就業者と同水準でなかったことはいうまでもない。

しかしここ数年の若年労働市場においては、若年全体の地位低下による [非正規—男性] および [非正規—（未婚）女性] という新たなカテゴリーが拡張すると同時に、能力主義的見地からの男女間の処遇の均等化圧力により、総合職など [正規—女性] カテゴリーの一部は仕事の内容や権限などの点で [正規—男性] カテゴリーにいつそう近づきつつある。

こうした近年の変化は、若年労働市場における正規／非正規および男性／女性という階層的対構造にいかなるゆらぎをもたらしているのか、あるいはもたらしていないのか。たとえば正規就業の男女間、非正規就業の男女間には、ジェンダーを超えた共通性が表れつつあるのか。逆に、男性、女性の内部では、正規／非正規の間に相違・対立・格差が拡大しつつあるのではないか。さらには、相対的に新規でマージナルなカテゴリーとしての [非正規—男性] と [正規—女性] との間には、何らかの親近性が見いだされるのか。本稿はこれらの問いにとりくむことを第1の課題とする。

いわゆる「フリーター」に代表されるような若年非正規就業者に関する実証的な研究は日本では緒についたばかりだが、素朴な調査結果において

もジェンダー間の相違は明らかであるにも関わらず、男女をひとくくりにしてフリーター全体の特性が語られる場合が多い。しかし、もともと労働市場において男女の位置づけが大きく異なっているからには、フリーター（非正規）という選択肢を選ぶに際して個々人がたどる内面的なプロセスは男女間で同一のものではありえないため、より「真っ向から」フリーターをジェンダーという切り口から分析する必要がある。

上記の男女間比較をふまえた上で、さらに本稿は、女性内部の分化と階層性について、正規／非正規間の移動パターンを切り口としてより詳しい分析を行うことを第2の課題とする。現状としての正規／非正規だけでなく、初期キャリアの時間的経過の中で正規から非正規へ、また非正規から正規へ移動するのはどのような属性や条件をもつ女性であり、こうした移動経験が結果としてどのような意識をもたらしているかを検討する。

2. 分析結果

①就業形態×ジェンダーの比較分析からの知見

1) 就業形態による差は大きくないが男女間で違いが大きい諸要素の検討からは、独力による地位達成への野心を秘めつつ黙々と働く存在としての男性像が浮かび上がってきた。そのような男性像は、伝統的な男性の性役割を受け継ぐものである。そして多くの項目に関して、正規男性よりも非正規男性の方が「男性的な」特徴をより強く表しており、新規なカテゴリーとしての非正規男性はジェンダー的にはむしろ保守的な傾向を示している。同様に女性の間でも、いかなる就業形態であれ「家庭を守る」存在としての女性像は根強い。しかも、独立や有名さ、高収入など職業に関わる積極的な志向は非正規女性よりも正規女性の方が一層希薄であり、正規女性の中にもジェンダー的な保守性が観察される。

2) 逆に性別よりも正規／非正規という就業形態間で差が大きい諸点を総括するならば、やはり現在の状況だけでなく生家の豊かさなど過去の経歴についても「有利／不利」ということが両者の決定的な違いと言わざるをえない。ただ、主観的な意識の面では、非正規就業者の中に、「やりたいこと」や多様な職業経験の重視など、自らの現状を肯定的にみる意識がかなり強く、彼らは客観的な不利さにくじけているわけではない。しかしやはり、現在の仕事が充実したものと感じられる度合いは正規／非正規によって大きく異なり、現在

の日本における非正規就業が労働条件のみならず仕事内容の点でも縁辺性を意味していることは否定できない。

3) 4つのカテゴリーの中で、正規男性と非正規女性は両極に位置している。すなわち、量的にも質的にもフルに働いており、従来の「企業社会」的価値観を体現しているのが正規男性であるのに対し、非正規女性は労働時間や報酬が少ないだけでなく、非正規の働き方を肯定する意識も強い。この両者は既存のジェンダー秩序と労働秩序の重なり合いをもっとも明確に担っているグループである。

4) 正規女性および非正規男性は、上記の両極の中間に位置しているという点で親和的である。この両者に共通しているのは、ジェンダーと就業形態とのねじれのために、企業社会との関係の取り方が曖昧さを帯びていることである。ここから一見、この両者の間に一定の「連帯」が成立することにより、企業社会やジェンダー秩序を変革する潜在力となるかのようにみえる。しかし、その期待はすぐに裏切られる。なぜなら、正規女性がその経歴や現状において客観的・主観的に恵まれているのに対し、非正規男性は客観的な現在及び過去の状況に加えて主観的な現状評価の面でももっとも否定的である。正規女性は女性の中で相対的に「上層」であるのに対し、非正規男性は男性の中で相対的に「下層」にあたり、それぞれの母集団の中での相対的位置づけが対照的である。しかも先述のように、両者はいずれも従来のジェンダー秩序に対して順接的であり、一方は女性性を、他方は男性性を強く帯びている。それゆえ、マージナルなカテゴリーとしての正規女性と非正規男性は、少なくとも現状のままでは、旧来の秩序に対する変革の基盤となりそうにない。

②就業形態の移動パターン間の比較分析（女性内部）からの知見

1) 現状としての正規／非正規の間には、上記の分析結果と同様の、「有利／不利」および「労働力としての確立の度合い」をめぐる明確な相違が存在していた。学校卒業直後の状況としての正規／非正規は、単独ではそのような明らかな違いを生み出してはいないため、やはり現在の就業形態が客観的・主観的な諸状況に及ぼす影響力は大きいといえる。しかし以下にみるように、過去と現在の就業形態の組み合わせから構成される各カテゴリーには、一定の特徴が見出される。

2) すなわち、まず「正規一貫」の女性は、正規女性のコア的な存在であり、客観的な現状において有利であるとともに、そうした自分の状況への肯定感も強い。そのような現状は、出身家庭の文化的・経済的なゆとりを背景としている。そして、彼女たちはジェンダー面および職業面で保守的な傾向を示しがちであり、ジェンダー的規範に抵触しない範囲で地位達成を志向する「しとやかな優等生」（木村 1999）といえる。彼女たちが、自らの将来に対して積極的な展望を抱けないことが逆説的である。

3) 「非正規一貫」の女性は、客観的・主観的な現状の面で企業社会からもっとも離脱した存在ではあるが、同時に相対的に高い出身階層やジェンダー的な保守性をも特徴としており、既存の秩序を覆すようなパワーは感じられにくい。

4) 非正規から正規に移動した「正規参入」の女性は、本人と出身家庭のいずれに関しても、職業における専門性や経済的自立に価値をみいだす積極的な意識と行動を明らかな特徴としている。ジェンダー的にも革新的であり、いわば「男まさりの優等生」（木村 1999）と呼ぶことができる。ここから、若年（女性）の初期キャリアにおける非正規就業経験は、一定期間後に正規就業に移行できる限りにおいては、むしろ非常に有意義であるという理解が導かれる。

5) 正規から非正規に移動した「正規離脱」は、多くは高卒後に家計を助ける必要から学校推薦で正社員としていったん就職したが、仕事内容への幻滅や結婚・出産などを契機としてアルバイトやパートに移行し、将来いわゆる「おみせ」を開くことを理想としているような女性たちを中心とする。意識面でのフリーター肯定は非正規一貫ほど明確でなく、ジェンダーなどの意識に関する特徴も見定めにくい。

以上にみてきた限りでは、若年の中での非正規労働の広がりや女性の正規就業化は、日本の従来の企業社会秩序やジェンダー秩序に対して大きな脅威となっていないようにみえる。非正規就業の男性は厳しい条件下で正規就業の男性以上に男性的な成功を求め、非正規女性は企業社会に背を向けてはいるが、親ないし夫への依存に逃げ込んでいる。他方で、正規女性は「恵まれた」背景と現状に安住しがちである。ただ女性の中で、非正規労働から正規労働に移行した者については、その職業面・非職業面の両方に及ぶ活力の大きさゆえに、新しい可能性が感じられる。（本田由紀）